

SITC JAPAN (株)・創立20周年

次なる目標は東南アジア航路拡充!

中国最大の民間船社 SITC Container Lines の日本総代理店である SITC JAPAN 株式会社は、この12月で創立20周年を迎えた。日中コンテナ航路の拡大をとらえて躍進した SITC グループはさらに、新興アジア市場の勢いを取り込んで飛躍を図る。

日中航路とともに成長して

「SITC JAPAN は、ことし20周年を迎えました」と SITC Japan の呂 開献・代表取締役社長(右写真)は感謝を込めて語る。



SITC 本体が楊 紹鵬氏(現会長)により山東省青島市に設立されたのが1991年だから、来16年は中国に SITC 本社が誕生してから25周年となる。

SITC の躍進は92年に投入船1隻で開始した青島～神戸コンテナ航路に始まる。その後、中国の経済開放政策による日中コンテナ

航路の急拡大という波に乗り、SITC の定航サービスは急成長を遂げた。それは単に幸運だったわけではなく、時代の流れを的確に捉えて対処する明確なビジョンを、SITC が持っていたからに他ならない。

日中コンテナ航路は輸出入を合わせて300万TEU規模に成長したわけだが、すでにトレードとしては成熟している。そこで SITC グループでは、今度は新興アジア市場の成長をとらえることで、次なる成長のステージを迎えようと事業展開を図っている。

合い言葉は“FOCUS ASIA”

そうしたポリシーを表したキャッチフレーズが FOCUS ASIA である。

SITC JAPAN の呂社長は「東南アジア域内では、ベトナム航路で優位を築いています。このトレードでは日系企業に関連するベトナム発・日本向けの物流需要が大きいですね」と説明する。

同社は2009年のベトナム進出にあたって、まずはベトナム北部の Haiphong サービスからスタートした。ベトナム北部が南中国と経済的な結び付きが強いこともあってこの策は効を奏し、現在では9ループ週9便の Haiphong サービスを築き上げている。

「今では南部の Hochiminh も8ループ週8便あるほどで、ベトナム航路は軌道に乗っています」と呂社長は自信満々だ。

SITC のベトナムに対する取り組みで特徴的なのは、海上輸送の現地法人である SITC ベトナムのほか、物流部門の SITC ロジスティクス・ベトナム、コンテナデポ運営では Haiphong 地区の SITC ディンプ・ロジスティ

SITC のアジア展開の沿革

- 1992年：中国・青島～神戸間コンテナ航路開設
- 1995年：SITC JAPAN Co., Ltd. 設立
- 1997年：渤海湾航路、上海航路を開設
- 2002年：韓国現法 SITC KOREA 設
- 2004年：東南アジア航路(フィリピン、ベトナム、タイ～中国、日本)を開設
- 2007年：グループ本社を上海へ移転
- 2008年：SITC Shipping Asia をシンガポールに設立して、アジア展開を加速
- 2009年：SITC Container Lines の現地法人をフィリピン、ベトナム、タイにそれぞれ設立
- 2010年：香港証券取引所1部(メインボード)上場
- 2012年：インドネシア航路に進出
- 2013年：東マレーシア航路に進出
- 2014年：PT. SITC Indonesia, SITC Container Lines (Cambodia) Co., Ltd. を設立

クス、Hochiminhを拠点とするSITCニューポート・ロジスティクスという4法人が、グループ会社として協業していることだ。

「現在、フィリピン航路の充実も、SITCにとってテーマのひとつです」と呂社長。

中国経済の減速が影響して、東南アジアの新興国も経済状況は明暗を分けている。明として期待されているのが、ベトナムとフィリピンである。

「フィリピンは輸入は中国から、輸出は日本へという商流で、東南アジア諸国の物流としては、よくあるパターンです」という。

日本標準の高品質AAAサービスを

「SITC JAPANは日本企業です。キメ細かで高品質な日本標準のサービス意識を、中国本社にも根付かせたい思いでやってきました」と呂社長は語る。

同社が掲げるのがAAAサービス、すなわちA（安全）A（安定）A（安心）な高品質サービスの提供である。それを次なる成長の舞台と位置付けるベトナム、フィリピンなどの東南アジア市場でも生かそうとしている。

「日系の自動車メーカーはタイとインドネシアをアジアでのコアな生産拠点としており、フィリピンやベトナムなどの部品工場との間でサプライチェーンを築こうとしています。SITCはそうした物流需要に則して、航路を設定しているのです」

SITC本社は自営化を重視しており、タイ、ベトナム、フィリピン、インドネシア、カンボジアなどに現地法人を設立しているが、SITC JAPANではタイとベトナムのそうした現法に日本人駐在員を1名ずつ派遣して、日系メーカーを中心に新規ビジネスの開拓、進出企業に対するキメ細かなサポート・サービスなどを提供している。

もちろん、両駐在員はタイとベトナムだけでなく、周辺の東南アジア諸国も対象としてビジネス開拓に情熱を燃やす。



SITCが誇る最新鋭1800TEU型船

一方、日本側ではSITC JAPANの東京本社に三国間チームを設けている。さらに航路ごとにラインマスター（責任者）を置き、駐在員と3者が協力して、あらゆる輸送ニーズに応えられるユニークなマーケティング体制を整えているのだ。

新造船隊はアジア仕様1800TEU型

そうした輸送のソフトをささえる船隊整備についても、はっきりしたビジョンを描いているのはさすがだ。SITCは従来、1000TEU型コンテナ船の大量シリーズ建造を続けてきたが、現在はアジア航路の拡充を見据えてバンコク・マックスの1800TEU型船×14隻のシリーズ建造を進め、昨2014年から本2015年にかけて次々と新造船の就航が続いている（上写真）。2016年には14隻が出揃う。

この1800TEU型船は、燃費効率が良いエコシップとして、英国王立船舶設計協会から最優秀船のお墨付きを得ている。

呂社長は「応接室に唐時代の詩人・王之渙の漢詩“欲窮千里目、更上一層楼”の書を掲げてあります。日本読みは“千里の目を窮めんと欲し、更に上る一層の楼”で、遠くを見るためには、より高いところに登らなければならないという意味です」と語る。

ビジネスでも常に上を目指す姿勢である。

20周年を機に日本法人はSITC JAPAN株式会社に登記名を変更し、従来使用していた海豊国際航運日本株式会社という漢字名はもう使わないという。漢字圏でないアジア諸国にも考慮して、SITCというブランドを確立することを狙った明確な戦略だ。錨

☆今週号表紙-4は同社創立20周年の広告です。